

中学校 社会科日本史教科書の 美術文化の考察

— 飛鳥時代から藤原時代まで —

天 野 茂 時

I はじめに

中学校教育に於て、美術科の内容である美術史学習（指導要領では鑑賞）の授業時間数は、極めて僅少であって、指導上非常に無理があると思う。よってこの無理を何とか解決せねばならぬと、社会科・日本史教科書を見ると、美術文化の教材が、かなり採択されているので、両教科が互に連絡をとれば、学習上の成果が或

る程度期待されるのではないかと考え、先づ日本史の教科書8冊について、美術文化に関する事項を、用語、人物、建築、絵画、彫刻、工芸其他に分類して、採択された事項を抽出し、その教科書の番号を記入して、時代別に一覧表を作成した。（後記）そしてその一覧表により、教科書8冊の中、5冊以上に共通に採択されている事項につき次表を得た。

| 事項時代 | 用語・人物 | 建築 | 絵画 | 彫刻 | 工芸 | 記載回数 |
|------|-------|--------------------------------|-------------|-----------------------|------------------------------|------|
| 飛鳥時代 | 飛鳥文化 | 法隆寺 8 | 聖徳太子 ① 7 | | | 八 |
| | | | | 釈迦三尊像 ② 5 | 玉虫厨子 ② 5 | 七 |
| | | | | | | 六 |
| | | | | | 弥勒菩薩(中宮寺) ③ 2 " " (広隆寺) 5 | 五 |
| 奈良時代 | 天平文化 | 正倉院 ① 7 | | | 正倉院御物 ① 7 | 八 |
| | | 東大寺大仏殿 7 | 法隆寺壁画 ① 6 | | | 七 |
| | | | | 東大寺の大仏 ① 5 鑑 真 ⑥ 6 | | 六 |
| | 聖武天皇 | 薬師寺の東塔 ② 3 | | | | 五 |
| 平安時代 | 大和絵 | 寝殿造 8 平等院鳳凰堂 8 中尊寺金堂 ① 7 | 源氏物語絵巻 ① 7 | 阿弥陀如来像 (鳳凰堂) 8 | | 八 |
| | 定朝 | | 鳥獸戯画 ① 6 | | | 七 |
| | 藤原頼通 | | | | 東帯 ⑧ 3 十二ひとえ ② 4 | 六 |
| | | | 信貴山縁起絵巻 ② 3 | 空也像 5 | | 五 |
| | 運慶 | | | | | 八 |

| | | | | | |
|------|------------------|------------------------|-------|------------------|---|
| 鎌倉時代 | | 東大寺南大門② 5 円覚寺舍利殿① 6 | | 金剛力士像 (東大寺) 7 | 七 |
| | 天竺様・唐様 肖像画・快慶 | | | | 六 |
| | 似 絵 | | 源頼朝 5 | | 五 |

○印の数字は、名称だけの回数 ○印のない数字は、写真、図判の回数

以上、紙面の関係上、鎌倉時代までを記したが、この表によると、教材採択にかなりの相異があった。それは教科書の独自性から当然であろうが、しかし各時代に8冊全部から採択されねばならぬ重要な教材もあり、又採択自由の教材も内容の関係からあるであろう。しかし社会科と美術科の緊密な連絡が必然的に考えられる筈である。本稿はこの点に立脚して研究をすすめた。なお、調査に使用した教科書は、次の通りである。

| 番号 | 教科書名 | 発行所 |
|----|-------------------|-----------|
| 1 | 「新しい社会」2 | 東京書籍株式会社 |
| 2 | 「中学校社会科 歴史」 | 株式会社帝国書院 |
| 3 | 「中学生の社会、日本と世界の歩み」 | 株式会社日本書院 |
| 4 | 「中学校社会、日本の歴史」 | 学校図書株式会社 |
| 5 | 「中学社会」(歴史的分野) | 学研書籍株式会社 |
| 6 | 「中学校社会 歴史」 | 大日本図書株式会社 |
| 7 | 「中学社会 歴史上」 | 株式会社三省堂 |
| 8 | 「中学生の社会科日本の歩みと世界」 | 中教出版株式会社 |

II 日本歴史と日本美術史について

美術史家の美術史研究方法には、文献考証を主とする方法(文献学派)、作品の綿密な作成を主とする方法(実証学派)、部分部分の様式をとらえて、それでもって作品の影響関係や発達史をたどる方法(様式論派)、作品と社会的背景との関連を明らかにしようとする方法(環境論派)、或いは自然科学的方法を用いて素材や構造の分析を行なう方法(考証学派)、其他さまざまな方法が混用されているが、いずれも意義のある研究方法である。

しかし美術史学的研究は、美術作品をただ単

なる「もの」として取扱うべきでなく、「生きた美術品」「生きた作品」としてとらえねばならぬことである。「生きた作品」として、とらえるということは、作品自身が語る言葉、それは作品の美的意味内容を、その表現の全体及びすみずみにわたって見抜くことであって、作品をただ視覚に写る形、色としてではなく、その作者、時代、あるいは民族のさまざまな意味を含んだ所謂芸術的意志の現われとして見ることである。そして美術史家は、それを語らねばならぬ。であるから一つの作品を見ることは、それが美的であればある程に、その時代、民族の語るところにふれねばならぬ。

一般の歴史にあげられる美術文化についても、恐らくその時代、民族の生態度がその根底に探られねばなるまいし、またその時代の民族の生態度により、その時代の美術品が生まれ出たことを知らねばならぬと思う。

このように考えると、美術史が美術の歴史であることから、普通一般の歴史にあげられる美術文化とは基底に於て一致すると考えられる。

尚、従来美術は、歴史的には絵画も彫刻も建築も工芸も緊密に結び合い、また他の芸術の部門に属する音楽、文学、演劇、舞踊なども密接に結び合っていたのであるから、美術は生活上の必要から生まれ、生活のうちに於て発達したことを忘れてはならぬ。従って美術を実生活と密着させて考えると、文化史の資料としての美術は、先史時代にさかのぼり、石器時代人の生活用具のうちにも見出されるし、また広く民衆の暮らしのなかにある道具類のうちにも求めることができる。それらには、それをつくりそして用いた人々の生活即生が強く内蔵されている。ことに美術は有形の文化財であるから、われわれはそれによって永い年月の隔たりを越え

て、直接に過去の生活の営みに触れることができる。ここに美術が文献や無形の文化財などと違った歴史の資料としても重要性をもつと云える。

かかるが故に、美術文化が歴史（社会科教科書）に大きく取り上げる所以であり、そして美術文化の重要性を認識すれば、その美術文化の教材としての採択については、充分なる研究を要することとなる。

III 時代区分について

中学校社会科指導書（P.147.）には、(2)時代区分は、指導上の観点によっていろいろなものが考えられるが、細かな時代区分だけにとらわれて、大きな時代の流れや、その時代の社会の特色を見失わないように留意する心要がある。一と記されていて、現在の日本の歴史学界で比較的多く使われているのは、原始、古代、封建近代であり、これは多くの国々の歴史に共通に適用できる時代区分であり、また、社会の発展の段階を示すには、図式的に適用しないかぎり、適当なものであると考えられている。

日本史については、このほか、たとえば、大和、奈良、平安、鎌倉、室町（足利）、安土桃山（織田、豊臣）、江戸（徳川）などのような政権の所有者や所在地による時代の区分や名称が古くから行われている。これらは時代を細かく分けるときに便利であり、また、政治の表面の移り変りを示すのに適当なものではあるが、その場合でも中学校社会科の歴史的分野の学習

では、たとえば奈良、平安時代とか鎌倉・室町時代のようにくり方が望ましい。要するに、社会や文化の発展の大きな流れを理解するためには、このような時代区分だけではふじゅうぶんであるから、発展的な大きな4つの区分を基礎として使用することが適当であろう。

以上は社会科に於ける時代区分の根本であるが、日本美術史に於ては、時代様式の変化は時代精神の展開に伴って徐々に行なわれるものであるから、政治、社会の変遷の如く、遷都とか、政権担当者の交替、或いは社会制度上の変革というような事件によって時代を画することが困難である。政治、社会の上では、すでに新しい時代にはいつているのに、美術の好尚やその様式はなお前代の風が続いている場合や、中央では新しい美術様式が起こっているのに、地方はまだ旧様式にとどまっている場合がある。

したがって美術の歴史の時代区分は一般の歴史の時代区分と若干相違し、また人によって差異があるのはやむを得ないことである。といっても美術が一般社会事象から独立しているわけではないから、おおよそ一般に行なわれる時代区分と並行して一応区分される。ただし時代呼称に美術史独特のよび方をしているものがある。奈良時代を白鳳時代と天平時代とわけ、又平安時代を貞観時代と藤原時代に分けて呼称するなどがその例である。

従って、時代様式の明らかな作例で、しかも製作年代の明確なものを基準とし、他方歴史全体の変遷を考慮しながら次表の如き時代区分に従っている。

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------------------|------|------|------|---|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|------|------|------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ↑ 社 会 ↓ | 原 | 始 | 古 | | | | 代 | | | | 封 | | 建 | | 近 | | 代 | | | | | | | | | | | | | |
| | 大 | 和 | 奈 | 良 | 平 | 安 | 鎌 | 倉 | 室 | 町 | 安 | 土 | 桃 | 山 | 江 | 戸 | 明 | 治 | 現 | 代 | | | | | | | | | | |
| ↑ 美 術 ↓ | 縄 | 文 | 弥 | 生 | 古 | 墳 | 飛 | 鳥 | 白 | 鳳 | 天 | 平 | 貞 | 観 | 藤 | 原 | 鎌 | 倉 | 室 | 町 | 桃 | 山 | 寛 | 文 | 寛 | 政 | 明 | 治 | 現 | 代 |
| | B.C. | B.C. | A.D. | | 650 | 730 | 780 | 980 | 1180 | 1330 | 1570 | 1620 | 1720 | 1870 | 1920 | | | | | | | | | | | | | | | |

上記中、美術文化については、「美術」の時代区別に従って記述をすゝめる。

IV 各時代別による美術文化

1. 飛鳥時代の美術文化

表(1)は、教科書を調査した結果で、数字は前

美術文化の考察

記教科書を示し、○印は図版がなく名称のみ記載された印である。表(2)は表(1)を参考とし、且つ美術史の見地から主要な事項を最小限に配当したもので、これが本研究の中心である。(各時代とも共通)

表1 飛鳥時代(教科書に現われた事項)の調査

| 用語・人物 | 建築 | 絵画 | 彫刻 | 工芸 |
|-------------------------|---------------|-----------------------|------------------|-----------------|
| 飛鳥文化 ①②③④⑤⑥⑦⑧ | 法隆寺 ①③④ | 聖徳太子(御物) 1 ②③④⑤⑥⑦⑧ | 釈迦三尊 2 6 | 玉虫厨子 ①②③④⑤⑥⑧ |
| 仏教文化 ⑥ | 法隆寺西院の全景 ② | 玉虫厨子の絵 ③ | 釈迦三尊像 ①③④⑤⑧ | |
| 大朝文化 ⑥ | 法隆寺全景 ⑤⑥⑦ | | 救世観音 6 ②④ | |
| エンタシス ③⑥ | 法隆寺西院 ③ | | 百済観音 ①②③ 6 ④ | |
| 唐草模様 ⑥⑧ | 四天王寺 ②⑥ | | 中宮寺半跏思惟像 ⑥⑧ | |
| 聖徳太子 ① 2 3 4 5 6 7 8 | | | 中宮寺弥勒菩薩像 ④⑦ | |
| 鞍作鳥 ③⑥ | | | 中宮寺の仏像 ⑤ | |
| 止利仏師 ③⑧ | | | 広隆寺半跏思惟像 ⑥ | |
| | | | 広隆寺弥勒菩薩 2 ③ | |
| | | | 広隆寺弥勒菩薩半 跏像 4 | |
| | | | 広隆寺の仏像 ⑤ | |

表2 飛鳥時代(600~650)の美術文化

| 用語・人物 | 建築 | 絵画 | 彫刻 | 工芸 |
|---------|-----------------|----|-----------------------|--------------|
| 飛鳥文化 | 法隆寺西院 (四天王寺) | | 釈迦三尊像 | 玉虫厨子(法隆寺) |
| 聖徳太子 | | | 薬師如来坐像 | 天寿国繡帳残欠(中宮寺) |
| 止利仏師 | | | 観音菩薩立像(救世観音) | |
| エンタシスの柱 | | | 観音菩薩立像(百済観音) 以上法隆寺 | |

(1) 飛鳥時代(600~650)の概説

飛鳥人は、自然に対する畏敬の念をもち、自然と人間との間にへだたりがあった。そこで、神を人の形に表現する造形習慣はなく、神は人に依して自らを顕現した。そして神々は人を守り、幸を与えたが、祭の足らぬ時や、穢には怒り禍を下す恐るべき超越者であった。

仏教については、聖徳太子の如き『三経義疏』

をあらわしたような理解者もあったが、多くは仏教の深遠な教は不理解であって、仏を仏神、蕃神、他国神などと呼び、国神と同じく、『恐ろしきもの』、『たたるもの』であると共に、『恵むもの』、『幸うもの』と考えていたので、仏は超越的存在であり、未親和的存在であった。こうした世界観により、仏像も遙に遠く、近づき得ない、多分に神秘性を有したのものとして表

現された。ここに飛鳥様式の形成された根源がある。

飛鳥時代の美術文化

。 建 築

推古朝に入る以前に創立されたのが、大和の飛鳥寺である。本寺は蘇我氏により建立された日本最古の重要な仏寺であったが、12世紀末に焼失して現在では、堂塔の配置さえはっきりせず、ただ金銅丈六の本尊（釈迦如来坐像）だけがひどく修補されながら安居院に「飛鳥大仏」として残っている。

四天王寺 四天王寺（大阪市所在）は、聖徳太子建立の7カ寺の1で、古来荒陵寺、難波寺ともいわれ、南北の一直線上に堂塔伽藍が配置され、この配置を四天王寺式の伽藍配置と呼び、中国、朝鮮の形式をそのまま伝えたものであるが、たびたび焼け、また大風で倒壊した後、に再建されたが、昭和20年（1945）に戦災であとかたなく失われたが、其後復元された。

法隆寺西院（中門、金堂、五重塔、講堂、廻廊）

法隆寺は四天王寺と同様に聖徳太子が推古天皇と用明天皇の遺願を奉じ、推古15年（607）に建立されたもので、伽藍配置は、金堂と五重塔が左右に並ぶ法隆寺式様式で、この様式は大陸にも半島にもいまだ的確な類例がないため、日本で創造されたとする説がある。

日本書紀の天智天皇9年（670）に、一屋を余すことなく焼失した記事があるが、再建した記事がないところから、再建論と非再建論の問題が起こり確実ではない。

教科書には、この法隆寺は8冊全部に写真版として掲載されているが、その標題が表に示す如く、法隆寺、法隆寺全景、法隆寺西院の全景の3通りがあるが、これは正しくは「法隆寺西院の全景」である。そして法隆寺東院は「夢殿」が中心となるが、しかし夢殿は奈良時代（天平）であるから、天平時代の項に記した。

飛鳥建築の特徴

飛鳥建築の様式の特徴は、全体的な観点から、建築の比例が低く、構造上の手法が強く、大胆で、小さい局所にこだわりを見せないの

安定感があり、緊張感がある、それを要素的にみると、

①二重基壇の形式 ②柱には胴膨みがある
③料供は雲形である ④勾欄に見るくくずしの組子と人形臺段の形式 ⑤屋根の傾斜が比較的ゆるやかである ⑥軒の高さが比較的低く、軒の出が深い ⑦重層以上の建物では各層軸部の通減率が大きい。

法隆寺西院の各建築については、種々の図書があるので、詳細はそれにゆずり、参考書を記しておく。（社会思想研究会刊、「法隆寺」。朝日新聞社刊、「法隆寺」）

。 彫 刻

彫刻では、法隆寺金堂「釈迦三尊像」が、前記の如く7冊に掲載されている。しかしこの仏像の名称には、釈迦三尊と釈迦三尊像とがあったが、これは当然後者が正しい。そして「薬師如来坐像」が「未掲載」救世観音像が、写真判で1回、名称だけで2回掲載されているが、これも止利仏師様として全部を知らせたい。そして百済観音像が写真判で4回、名称だけが1回でているが、これは止利様とは別であるから当然掲載したい。

尚、広隆寺、中宮寺の仏像は様式の上から白鳳時代に於て述べる。

釈迦三尊像（法隆寺金堂、銅造、像高（中尊）86.4（右脇侍）93.9左脇侍（911.0）

本尊の造像のことは光背の裏面に刻まれた造像記に記されている、これによると、聖徳太子の冥福を祈って、王后諸臣が仏師司馬鞍くらづくりのおびと作首止利に作らしめ、推古天皇31年（623）3日に完成されたものである。

薬師如来坐像（法隆寺金堂、銅造、像高63.0）

この像は、古式の忍冬文様の宝珠形光背の裏面に、用明天皇が病氣平癒のために、丙午の歳（586）に寺と薬師像を造ることを誓願されたが、崩御されたので、推古天皇と聖徳太子が推古15年（908）に完成された由がきぎまれている。このことは天平19年（747）の本寺資財帳によって裏書きされている。前仏像と造像年次は、本像が古いので金堂の本尊であったというのが、尚

この像は銘文考証上から種々な疑問が起っている。しかし前者と共に飛鳥様式を示す代表的な像である。

観音菩薩立像（法隆寺夢殿，木造，像高197.0）

本像は救世観音とよばれる，夢殿の秘仏である。樟材を用い，胡粉地に金箔押の像で，天平宝字5年（761）の本寺の記録に「上宮王等身観世音菩薩木像一軀金箔押」とあり東院伽藍縁記によれば，天平11年（739）に行信僧都が夢殿を再興したときに安置したものと認められる。特に本像は明治17年，岡倉天心とフェノロサにより約3メートルの白絹布により包まれたのを取りのぞいて，世に紹介されたことはあまりにも有名である。以上三軀は中国，北魏様式によるもので止利仏師様といわれる。

観音菩薩立像（法隆寺，木造，像高209.4）

伝百済観音と称して，百済の人の作という。樟材の一本の彩色像の長身で余りにも有名である。止利仏師様の像と比較すると側面観がよく意識され，体に丸味がでて，写実味も多く，つつしまやかな眼，鼻だちには親しみを感じる，止利派と別な美しさを示している。

飛鳥彫刻の特徴

飛鳥彫刻は，北魏系と百済を通じて伝えられた南梁系の二様式がある。この二様式が入れまじって日本化した様式が飛鳥彫刻の特色である。勿論固定化した，概念的特徴をあげることができず。

①全体の形が二等辺三角形。②現実の人体の抽象化された観念的な形態。③技術的には，
 。顔が長く角ばり気味 。目は杏仁形 。口唇は仰月形即ち古拙的微笑（Archaic Smile）。
 指の爪が長くつき出ている 。衣紋は左右均斉でその尖端は尖り，硬直している。

表1 奈良時代（教科書に現われた事項）の調査

| | | | | |
|-----------------|-----------------|--------------------|------------------|-------------------|
| 仏教文化（白鳳文化） 6 | 薬師寺の東塔 3④⑤⑥⑧ | 壁画（法隆寺） ①③④⑤⑥⑦⑧ | 薬師三尊（白鳳文化） 6⑧ | 正倉院御物 ①②③④⑤⑥⑦⑧ |
| 仏教文化 4 | 東大寺 ③④⑤⑧ | 吉祥天女像（薬師寺） ①④⑥ | 東大寺の大仏 ③④⑥ | |

。工 芸

玉虫厨子（法隆寺，総高233.3）

厨子の上半の家型をなす部分は，当時の宮殿を模し，下半部は台座（須弥座）である。総体が檜造り，外面は黒漆塗，木口，柱，桁，框等には透彫りの金具を張り，宮殿の部分は金具の下に玉虫の羽を伏せたところより，玉虫厨子と呼ばれている。宮殿は単層入母屋造り，正面と両側に扉を付し方柱，雲形肘木を用い，屋根は鋳葺で鴟尾を上げている。以上が法隆寺金堂中門等に似ているのでこの厨子は注目される。宮殿の内部は金銅押出像が張られ，正面の扉には二天像，左右の扉には各二菩薩，後壁には多宝塔，又須弥座の正面には舍利供養図，右側に捨身飼虎図，左側には施身聞偈図，後面に須弥山の図が，彩色してある。それぞれの図の解説は興味ある仏説であるが，略す。

天寿国繡帳残欠（中宮寺，縦88.8 横82.7）

「上宮聖徳法王帝説」記載の繡帳銘文によれば推古天皇30年（622）2月，聖徳太子が薨ぜられた後，王妃橘大女たらはなのおおいらつひめ郎が図像により天寿図に於ける太子往生の様を見んと采女等に繡の帷二帳を作らせられた，その残欠であって，制作年時と由緒の明らかな上代繡技の資料として我が国の工芸史上特筆される貴重な遺品である。しかし教科書には未掲載であるが採択したい。

2. 奈良時代の美術文化

教科書には，白鳳と天平に区分せず，奈良時代として総括してあるが，僅か1冊に「仏教文化（白鳳文化）」とあり，「天平文化」の語は全巻に掲載されている。

しかし美術文化の上からは，様式上から白鳳，天平と二分しないと内容的に解釈に困難が生じてくる。このことは，平安時代も同一であるから，本稿が，それぞれ二分した。

| | | | | |
|---|--|-------------------------------------|---|----------|
| 天平の文化 1 2 3 4 5 6 7 8 校倉造 1 3 5 聖武天皇 4 5 6 7 8 光明皇后 4 5 6 行基 4 5 6 8 | 東大寺の大仏殿 ③⑥⑦ 東大寺の南大門 4 法華堂 ④ 正倉院 ①②③④⑤⑥⑦⑧ 唐招提寺 ①②⑦ 〃の金堂 4⑥ 〃の講堂 3 夢殿 ⑥ | 鳥毛立女屏風の図 ①④⑤ 東大寺大仏(信貴山縁起絵巻) 8 | 奈良の大仏 ①⑤⑦ 法華堂の仏像 ⑧ 不空羅索観音 ②④ 月光菩薩 1②④⑥ 日光菩薩 ②④ 東大寺灯籠小袋の 天人浮彫 2 執金剛神 ② 増長天(戒壇院) 6 阿修羅像 3 6⑧ 十二神将(新薬師 寺) ④ 鑑真 ①③⑤⑥⑦⑧ | 伎楽面 ⑧ |
|---|--|-------------------------------------|---|----------|

表2 奈良時代(白鳳時代650~730, 天平時代730~780)の美術文化

| 用語・人物 | 建 築 | 絵 画 | 彫 刻 | 工 芸 |
|-------------------------------------|---|---|---|--|
| 天平文化 (仏教文化) 聖武天皇 鑑真 校倉造 | 薬師寺の東塔 東大寺の大仏殿 正倉院 夢殿 唐招提寺金堂と講堂 | (法隆寺金堂壁画) 吉祥天像(薬師寺) (鳥毛立女屏風) (正倉院) | 弥勒半跏思惟像 (中宮寺, 広隆寺) 薬師三尊像(薬師寺) 聖観音立像(鰐淵寺) 法華堂の仏像 鑑真像 行信像 (四天王像, 戒壇院) (十一面観音立像, 聖林寺) | 正倉院御物 (金属, 漆, 木材 染織工芸) 東大寺灯籠小袋の 天人浮彫 |

(2) 白鳳時代(650~730)の概説

本時代は、美術史にては、飛鳥時代と明確に区切って考える必要がある。それは随、唐の様式が直接に移入され、しかも日本の民族的なるものが復興しているからである。

白鳳時代の美術作品はほとんどが仏教美術である。聖徳太子の肖像が、全冊に載せてあるが、これは三尊形式の絵画であって仏画と見做

してよい。

本時代は大化改新により、「大らかなもの」が見られる。これは班田制によって、ある程度富の分配が行なわれた関係で、所謂安居楽生の気風が高かったことが一原因であろう。

迷って、自然に対し親和的な世界観が見出される、これが日本民族の復興の意味として感じられるのである。天智天皇が藤原鎌足に「春山

万花艶、秋山千葉彩、をきそわせられたこと、
 『わだつみのとよはた雲の…』の歌は、夕雲の美を認めたもので、これらは、自然美を認識し比較したもので、自然に対しての親和の精神の現われた例で、それは感覚的に美を求める、即ち感性的なものを求める精神の現われである。しかし白鳳人の感性は素朴であって、これを幼児性と称することができる。

この幼児性に見る美的なものは、感覚的であって、『あどけなさ』『無邪気さ』である。これが表現されて、白鳳時代の美的様式を形成している。しかし技術的には未熟のために、浮彫的に表現されている。それは彫刻の背後が平面であり、且つ本時代に特に押出仏の多いことでも分かる。

この幼児性から現われるものに、柔軟性がある。それは、顔面の童顔、首の三道、頭部及び臍が身体に比して大きいこと、姿態が半跏思惟体、遊足体であり、天衣はU字形そして、三面頭飾が見られる。(開学十周年記念論文集、白鳳期の様式参照)

。 建 築

薬師寺の東塔 塔の心柱の銘文によれば、薬師寺は天武天皇の即位8年(680)11月に皇后(後の持統天皇)御病氣平癒を祈願して天皇親らの発願により造営された。しかし当時は高市郡木殿であったが、和銅3年(710)の平城京遷都に伴い、養老2年(718)に現在の地に移された。しかし移されたというのは、移建か、寺籍のみの移転かと論議があるが、養老神亀年間(718~728)に造営されたであろうとする説が有力となった。

東塔は天平2年(731)の建立で、全高33.6米、相輪9.94米、飛鳥時代の法隆寺五重塔と比べて、この塔は軽快な姿である。そして雲斗雲肘木や卍崩しの勾欄、人字形割束などがなくなり、三手先の斗拱が現れ、軒も2軒になって丸い地極の上に角の飛担椽を重ね、軒天井が出現している。斯様な様子が白鳳様式といわれるものである。

西塔は享祿元年(1525)9月に焼失して、現在は心柱礎が三段に掘られて仏舍利を納めると

ころを作っているのが残存している。

特に相輪の水煙は高さ2米弱で、四面にあり、金色の火焰状の装飾中に天人の舞う姿は、実に美しく、この金色が奈良平原から眺望されることがすでに仏教文化の誇りを示している。

(岩波写真文庫、「薬師寺と唐招提寺」。美術出版社、「薬師寺」)

。 彫 刻

弥勒菩薩半跏像(京都、広隆寺、木造、全高123.3)

菩薩半跏像(奈良、中宮寺、木造全高133.0)
 この2像は造像年代は不明であるが、様式からは白鳳前期と考えたい。

本像は平面性から浮彫性への移行期の作で、姿態は百済観音と違って自由なところがみられる。

教科書には各々3種の呼称が出ている、分かり易くするためであろうが、正しい呼称を知らせる必要がある。

広隆寺は、聖徳太子が摂政のとき、飛鳥京に八カ寺を御造営になったが、太子の経済力では困難で、その中の蜂カ丘の1寺を、秦川勝が本籍地の太秦に移建したものである。

本像は、記録によれば、「金色弥勒菩薩像一軀居高二尺八寸所謂太子本願御形」とある。中宮寺の像と比較すると、本像は頭部と宝冠がともに大きく目立ち、台座は逆に小形で全体の形は必ずしも均整がとれているとはいえない。単純ななかに象徴的な趣きをよく表現しており、このために清らかな美しさと気品をただよわせている。

薬師三尊像(薬師寺、銅造、像高薬師如来254.8 日光菩薩311.8 月光菩薩309.4)

三尊が美ごとに統制されて、その一体一体が、白鳳様式を示しているが、ただ眼に天平様式が見られないでもない。この像が臘型により鑄造されたときいては、驚歎せざるを得ない。特に中尊の掌、と足裏には輪宝、卍、魚形などの靈文が刻まれていて、經典に説く仏の姿を示した珍らしいもので、台座の文様とともに注目される。

三尊像の造立年代は、薬師寺草創（694）説、平城京に遷都後の造像説とあり、決定はむつかしいが製作の規模の大きさ、技術の巧みさは、東洋美術の誇りとする名作であるところから掲げた。

観音菩薩立像（薬師寺、銅造、像高188.5 台座高48.2）

薬師寺の東院堂に安置され、前記の薬師三尊像の自由な表現に対して本像は直立し、引締った端正さと、衣文、裾、天衣の均整をみる。薬師三尊と同じく唐風様式を伝える白鳳時代の作であるが、遠い中印度様式をもあらわしている点がとくに注目される。鍍金は剥落し、光背も失われている。本像は聖観音と称せられている。

観音菩薩立像（島根県鰐淵寺）銅造、像高80.0
本像の台座の框には「壬辰年5月出雲国若狭部臣徳太理為父母奉作菩薩」と陽刻された銘文



観音菩薩像
(鰐淵寺)

が横書されているので、持統天皇6年（692）に造像されたもので、美術史上に於ても貴重な像であり、白鳳様式を物語るものとして是非取り上げるべきものである。（詳細は、昭和35年、開学十周年記念論文集（教育）12頁参照）

(3) 天平時代（730～780）の概説

天平人は、天皇を中心とした理想的国家建設

の情熱に燃えたと見るべきである。かの『青によし奈良の都は咲く花のにはうが如く今さかりなり、と歌はれたことを考えれば、現実よりも一層理想化された、理想の世界観からのあらわれである。いわば、国民感情の青春昂揚、日本民族が春を迎えた時代である。しかも唐からの移入もあったが、それが日本化されて天平時代独自の時代に到達したことで、白鳳時代との区別も必然である。こうした理想的世界観に立脚したことは、美術文化に実に大きい影響をもたらしている。先づ、仏像を『ますらお、と見ていること、そして表現は、理想的写実であることである。

前者の例は、薬師寺にある仏足石の碑に『大夫（ますらお）の進み先立ち…』と仏をますらをと見ている。

こうした天平時代に於ての美術文化は結論的には、壮美（雄渾）、端正、そして華麗であるといわれている。

・ 建 築

東大寺金堂（大仏殿）（奈良、桁行五間、梁間五間、一重もこし附、寄棟造本瓦葺、正面唐破風附、銅板葺江戸時代）

東大寺金堂が正しいことは、東大寺地域を知ることにはうなづかれる、親しみのためか大仏殿の名称もよいが、天平の偉業は東大寺全域を先づ知らせたい。そこで大仏殿を東大寺というのはどうであろうか。大仏は盧舎那仏坐像（銅造、像高1490.0）と称す。特に蓮弁に、蓮華胎藏世界の仏、菩薩が線ぼりされ、そのすぐれた意匠と規模の大きさは他に類例のない天平盛期を語るが、他は治承4年（1180）及び永祿10年（1567）に兵火にて炎上、宝永6年（1709）公慶により落慶供養が行なわれて現在にいたっていることを知って始めて教材となる。詳細は「東大寺の歴史」、至文堂。「東大寺」、社会思想研究会刊。参照。

正倉院（奈良、東大寺境内、間口3300.0奥行900.0高さ300.0強寄棟造、木造本瓦葺）

寺院の主要な倉庫を正倉と称し、この正倉のある区劃を正倉院と呼ぶ、今では奈良にあって

もとは東大寺に附属していた正倉院のことを専ら指す。この正倉院は世界にも名高い宝庫で、明治以後は専ら皇室で管理されてきた。特に校倉造の雄大な建築で、床は高床式、床下の高さ200.0、経約70.0、高さ平均235.0の円柱40本の上に本屋ががっしりと支えられた。天平時代の注目すべき建築で、奈良時代、或は唐代の優秀な文化を示すものとして、各部分に連関が多い、詳細は、「正倉院」, 毎日新聞社「正倉院の宝物」, 社会思想研究会刊「参照。

唐招提寺金堂 (奈良, 桁行七間, 梁間四間, 一重, 寄棟造, 本瓦葺)

唐招提寺講堂 (奈良, 桁行九間, 梁間四間, 一重, 入母屋造, 本瓦葺)

唐僧鑑真(687~763)により、天平宝字年間(756~764)に創立された。この建築は中国の唐代建築の影響をうけた天平期の様式を正規にあらわしたもので、金堂は日本建築中で最も量感にとんだ名建築である。講堂は平城宮朝堂院朝集殿を移建し改造したもので、奈良時代の宮殿建築遺構とし唯一のものであり、当代の講堂としても、他に法隆寺伝法堂に例を見るだけの貴重な遺構である。特に鑑真和上の歴史と肖像と又貞観時代仏像と一貫して考えたい。詳細は「西ノ京唐招提寺」, 淡交社。岩波文庫, 「葉師寺と唐招提寺」参照。

法隆寺東院夢殿 (奈良, 法隆寺, 八角円堂, 一重, 本瓦葺)

法隆寺の東にはもと斑鳩宮があったが、それがほろびたあと天平11年(739)に本伽藍が創立された。これが法隆寺東院である。

寛喜2年(1230)に大修理があったが、二重基壇上にたつ平面は変わらず、屋根上の優美な青銅製棟飾りもあり、よくその美観を保ち特に天平時代の塊の様式を現わしていて、現存古建築中の優れたものの一つである。「法隆寺」, 社会思想研究会刊, 参照。

。 絵 画

吉祥天像 (奈良, 葉師寺, 麻布着色, 縦53.3 横32.0)

本図は天女盛装の姿をやや斜向きに描いたもので、描写はきわめて精緻で、ことに領巾(肩

から長く垂らした布)の薄絹うんげんが緑綢彩色の美しい衣裳を透かして静かに風になびく動勢は、その蛾眉がびほうきょう豊頬(三日月の眉に豊満な頬)の面相とともに、唐風の美女を見るようで、当時の仏画として稀有の優作である。

他に法隆寺金堂壁画があったが、焼失したために割愛した。

。 彫 刻

東大寺法華堂(三月堂)内の諸仏像は天平時代の像が多く、天平彫刻の宝庫である。従って「法華堂の仏像」と題した教科書もある。ここではその仏像の概略を記す。

不空羅索観音立像(乾漆, 像高632.1)

本像は、天平様式の典型的なもので、作例としても最初のものである。脱活乾漆造りで、この技法は、中国唐代の芸術文化から吸収したもので、本時代のみ流行している。天平時代の風格を有して、壮大な格調と端正な品位、風貌には厳肅にして潑刺たる丈夫ぶりの生気があふれ、宝玉をちりばめた宝冠、美しい光背、台座の荘嚴の妙と相まって天平彫刻の代表的傑作である。其他に、梵天(乾漆, 像高403.0) 帝釈天立像(乾漆, 401.5), 金剛力士像立像(乾漆, 像高, 東方326.4) 西方331.8) 四天王立像

(乾漆, 持国天308.5 增長天300.0 広目天304.2 多聞天310.0)があり、日光にっとう、月光がっこう菩薩立像(塑造, 日光206.3 月光206.6)が本尊の脇士となっている。この2像はともに、均衡のとれた、豊かな肉付けは、写実味に富んだ上に塑土であるため、肌目は柔軟で、高貴な理想的な姿である。又秘仏として、執金剛神立像(塑造, 像高173.9)が安置されている。(社会思想研究会刊, 東大寺)

鑑真和上坐像(奈良, 唐招提寺開山堂, 乾漆 像高79.7)

鑑真は唐の名僧で、わが国の招きに応じて来朝を決意したが、数度の渡航に失敗、ついに両眼を失明して、弟子達と来朝して戒を受け大和上の位を賜った。後年唐招提寺に退き、天平宝字7年(763)5月6日に歿した。

本像は内部に梓組みを施した脱活乾漆像で、

衣にも目立つ起伏がなくやわらかな、のびやかな、そして面相も体もまことに優しく美しく特に失明した両眼のあたりは、芭蕉の若葉しておん目のしづくぬぐわばや、の匂が胸を打つ、天平彫刻の写実の高さを語る名作である。本像は唐招提寺と一貫した教材としても重要である。詳細は「鑑真」、美術出版社刊。岩波写真文庫、「唐招提寺」、拙稿、「鑑真和上をしのびて」参照。

行信僧都坐像(奈良、夢殿、乾漆、像高89.7)

本像は夢殿との関連に於て採択した。像の内部に木枠の組まれた脱活乾漆の等身大で、姿から面相から、尋常の凡僧で終わることのできなかった面目をあらわしている、写実を根本としてしかもよくその精神表現にまで至り得ている点は、鑑真像とともに天平時代の肖像の彫刻の双壁であるとともに、吾が国最古の肖像彫刻として貴重である。

。 工 芸

表1 平安時代(教科書に現われた事項)の調査

| | | | | |
|------------------------|---------------------|----------------------|----------------------|-------------------|
| 平安初期の文化 5 6 | 平等院鳳凰堂 ①③④⑤⑥⑦⑧ | 源氏物語絵巻 ①② 3 ④⑤⑥⑦⑧ | 神像(葉師寺) ②⑥ | 衣 冠 1 2 4 ⑤ |
| 平安時代 3 | 平等院 ② | 鳥獣戯画 ①②③ 5 ⑥⑦⑧ | 十一面観音(法華寺) 6 ⑧ | 束帯 1 2 ④ 5 ⑦⑧ |
| 平安文化 3 | 中尊寺金堂 ①③④ 5 ⑥⑦⑧② | 信貴山縁起絵巻 ② 3 ⑤ 6 ⑧ | 如意輪観音像 ② | 十二ひとえ 1 2 ④⑤⑦⑧ |
| 唐風の文化 5 8 | 富貴寺 1 ⑤⑧ | 扇面古写経 ① 6 ⑦ | 鳳凰堂の阿弥陀仏 ①②③④⑤⑥⑦⑧ | 直 衣 2 |
| 藤原文化 6 | 富貴寺の阿弥陀堂 ② | 平家納経 ② 8 | 空也像 ②③⑤⑥⑧ | 狩 衣 2 |
| 国風の文化 2 5 6 | 室生寺金堂 ② | 阿弥陀来迎図(高野山) 6 ⑧ | 迷企羅(板影十二神将) 6 | |
| 日本風の文化 4 7 | 室生寺五重塔 ② 6 | 赤不動(金剛峯寺) 6 | 不動明王像 ⑤ | |
| 貴族の生活と文化 1 | 金剛峯寺 6 | | | |
| 浄土信仰と芸術 1 | 延暦寺 6 | | | |
| 大 和 絵 1 3 4 5 6 7 8 | 法成寺 ② | | | |
| 唐 絵 5 8 | 平安神宮 3 | | | |
| 絵巻物 4 5 6 8 | 厳島神社 ⑤ | | | |

正倉院御物 は、吾国最大の古文化財であって、その数は極めて多く、布切類は十万片を越えて整理の半ばといわれている程であるが絵画、金工、木竹工、漆工、陶器、ガラス器、楽器、染織、書蹟、伎楽面、生活文化財等に分けて考えられるが、その中から代表的なものを採るには困難なことである。勿論教科書にはそれぞれ異なるものが図版となっているので、これを説明すればよいが、それより、この御物の貴重なることの意義、世界文化とのつながりについて語るべきであろう。紙面の関係上具体的な説明はできないが、参考書を記しておく。(美術全集、「奈良時代篇」。「正倉院」、毎日新聞社発行。「正倉院の宝物」、社会思想研究会刊。)

銅燈籠(高さ400.0)八角の大燈籠で、わが国最古(天平時代)のもの、上部の扉は2面に唐獅子、6面に音声菩薩(天女)の浮き彫りがあり、天平の微笑をたたえた様は、当時代を象徴している。

3. 平安時代の美術文化

| | | | |
|-----------------------|-----------------|--|--|
| 来迎図 3 | 寝殿造 ①②③④⑤⑥⑦⑧ | | |
| 蒔絵 6 | | | |
| 藤原頼通 1 4 5 6 7 8 | | | |
| 道長 2 3 4 8 | | | |
| 源信 2 3 8 | | | |
| 定朝 1 2 3 4 5 6 7 8 | | | |
| 鳥羽・僧正 5 | | | |

表2 平安時代（貞観時代780～980、藤原時代980～1180）の美術文化

| 用語・人物 | 建築 | 絵画 | 彫刻 | 工芸 |
|-------|--------|--------------------------|------------------------------|----------------------------|
| 平安文化 | 室生寺五重塔 | 源氏物語絵巻 | 僧形八幡神像 (薬師寺) | 石製経筒 (鰐淵寺) |
| 大和絵 | 平等院鳳凰堂 | 信貴山縁起 | 釈迦如来坐像 (室生寺) | 秋野鹿蒔絵手箱 (出雲大社) |
| 唐絵 | 中尊寺金色堂 | 伴大納絵詞 | 十一面観音立像 (法華寺) | 片輪車蒔絵螺鈿手箱 金銅華鬘 (中尊寺) |
| 絵巻物 | 寝殿造 | 鳥獣人物戯画 | 薬師如来坐像他 (仏谷寺, 万福寺) | |
| 蒔絵 | | 山水屏風 | (聖観音立像) (禅定寺, 厳倉寺) | |
| 鳥羽・僧正 | | 阿弥陀聖衆来迎図 (仏涅槃図, 金剛峯寺) | 四天王像 (万福寺) | |
| 定朝 | | (扇面写経, 四天王寺) | 阿弥陀如来坐像 (平等院) | |
| | | (三十六人歌集, 西本願寺) | 阿弥陀三尊像 (十一面観音立像) (清水寺) | |
| | | | 良弁僧正坐像 | |
| | | | 行道面 | |
| | | | 舞楽面 | |

(4) 貞観時代 (780～980) の概説

貞観時代を弘仁時代ともよぶが、これは平安遷都から宇多天皇の御譲位即ち794～897をとる立場の人である。

貞観時代は、律令制度と前代の唐風文化を継いだ時代であるが、実質的には天平時代と大きい断層がある。

即ち天平時代と異なって、国民の生態度の消極化が根本問題となる政治の貧困、換言すれば貧窮な国民が多数でてきたそしてその反面に貴族階級が出現して中位のものが少なくなったことである。寺社、貴族など、権門勢家の庄園はますます発達し、農民の逃亡と庄園への流入は著しく、ために土地公有制は崩れようとし、また

貴族の権力が強大となって、官僚政治は無力となり、やがては他氏排擠と抑圧に成功した藤原氏一門の貴族政治の世と流れていった。

大体 800 年代は、東洋は一般に衰退したことは、唐、新羅、渤海の滅亡でも知ることができる。従って一般に栄える時代ではなく没落の時代、若さの失われた時代、所謂老成時代となった。その結果は国家意識は前代に比して甚だ衰え、その反面、自己意識が旺盛になってきた。仏教の鎮護国家思想は、本時代となり、密教が最澄、空海により弘められ、個人の救済に中心をおき、そして老荘思想の『無為自然』の風も入ってきたため、より消極的で個人的そして隱遁的となった。

その例は、仁明天皇が当時 7 才の皇太子と朝見式に於て対面されたときの記録に『其容儀如老成人』と記されていることは、当時代を如実に語るべきものである。

従って、こうした時代からは、明るいものは生れず、渋晦、憂鬱なもの、そして何かおさえつけられるような、重々しいもの即ち重厚で、ねばっこい官能的なものを感じるのである。

。 建 築

室生寺五重塔(奈良、三間五重塔姿、檜皮葺)

室生寺は宝龜末年から延暦初年(780~782)の頃に室生竜穴神の神宮寺として創立された、塔も当時の創立と思われる、弘法大師一夜造りの塔といわれる。高さ 15 米の小塔であるが、全体の形態もよく、組物は正面規の三手先となっている。相輪は他に類例のない意匠をもっている。法隆寺、薬師寺の塔との比較に於て様式がよく分かる。

。 彫 刻

僧形八幡(像高38.6) 神功皇后坐像(像高36.4)

仲津姫命坐像(像高36.1)すべて木造着色で、薬師寺の八幡宮の祭神である。密教では寺院に鎮守社ができ、神社には神宮寺が附属して神仏の習合と称した。こうした神社の祭神であるから、八幡神のごときは、神の姿で袈裟をつけた仏の姿である。女神は当代の高貴な女性の服装をしのぼせる、そしてこの様式は、量(力

の外的充点)的で、しかも晦渋である。

釈迦如来坐像(奈良、室生寺、木造、像高105.7)

檜材の一木彫成、肥満した体軀は膝も厚手で堂々たる安定感があり、特に鬚波式刀法が美ごとであって貞観時代の特色を実によく現わしている。其他に

十一面観音立像(奈良、法華寺、木造像高100.0)。如意輪観音坐像(大阪、観心寺、木造像高108.8) 薬師如来立像(京都、神護寺木造像高169.7) 薬師如来坐像(奈良、新薬師寺、木造、像高190.3)等があるが、本県の仏像があるため割愛した。

薬師如来坐像(島根、仏谷寺、木造、像高91.0)

聖観音立像二軀(島根、仏谷寺、木造、像高151.5と151.0) 仏谷寺の仏像は出雲様式の代表的なもので、しかもその中で最も古いものとされている。密教的な神秘性を有し、鬚波式刀法が見えている。

聖観音立像(島根、禪定寺、木造、像高227.3)

聖観音立像(島根、厳倉寺、木造、像高179.0)

帝釈天像(島根、厳倉寺、木造、像高、1545.)

四天王像(島根、万福寺、木造、像高、持国天188.0増長天192.5、広目天184.00多聞天186.5)クスの木の一木彫成で、よく貞観期の様式が見える。

薬師如来坐像(島根、万福寺、木造、像高113.5)

日光、月光菩薩立像(島根、万福寺、木造、像高日光142.0、月光144.0)

ヒノキの一木彫成で鬚波式刀法も見ることができる。詳細は拙稿(出雲地方に於ける貞観期仏像彫刻の様式、島根大学論集第7号)参照。

(5) 藤原時代(980~1180)の概説

本時代は、貴族階級が成立し、しかもこの貴族階級に対抗する、他の階級は見られなかった。従って政治に私的性格をおびてきたので、一般民衆との連絡が稀薄となり、公郷的なもので塗りつぶされるに至った。それに遣唐使が廃止されたため国外からの侵入もなく、国内的となって平和な時代が現出した。

その結果国風文化の発達をうながした。又仏教にあっては、難解な密教が、念仏易行の浄土

教に代り、源信の「往生要集」は、往生極楽の教行を濁世末代に万人の拠るべき道であることを明確にし、浄土教の基礎を固めた。斯様な時代に於ける国風文化は、[〃]丈夫ぶり、から[〃]女ぶり、への移行であり、「枕草紙」に見る女性の鋭い感覚的描写は、その代表的なものである。しかも彼等の生活は、室内的であって、これが工芸的、手細工的なものへの発達をうながした。こうした結果、藤原時代の美術文化は小さきもの美（倭小性）とおぼろ月夜にしくものはなし、と歌ったその明鮮性とが内容となる「優美」と、高貴性と静閑性とを内容とする「典雅」にある。これがまた、我国の美術文化の特色となっているといえる。

特に本時代の特色ある美術としては、大和絵とかな文字を指摘することができる。詳しくは「島大論集」、第5号、[〃]女性的なる美の根源とその内容、を参照されたい。

・ 建 築

平等院鳳凰堂 四棟〔京都、中堂、（桁行三間梁間二間、一重もこし付、入母屋造、本瓦葺）両翼廊（桁行各折曲り延長八間、梁間一間、隅楼二重三階、宝形造、廊一重二階、本瓦葺）尾廊（桁行七間、梁間一間、一重切妻造、本瓦葺）〕藤原頼通は永承7年（1052）宇治の別荘を施入して寺とし、天喜元年（1053）に新に阿弥陀堂を営み供養した。これが鳳凰堂である。もっともこの堂は阿弥陀堂と呼ばれてきたが、江戸時代の初期頃から、全体の形が鳳凰をかたどったものであるとして、もっぱら鳳凰堂と呼ぶにいたったのである。外観は変化にとみ美観であるが、中堂内部の豊富な装飾は、絵画、文様、螺鈿等を駆使して、藤原氏全盛時代の美術の粋を集めたもので、極楽浄土欣求の象徴として生れた名建築である。（美術出版社、「平等院」）

中尊寺金色堂 一棟（岩手、金色院、桁行三間、梁間三間、一重、宝形造、本瓦形板葺）

藤原清衡の造営による寺院で、棟木の銘文により天治元年（1124）の建立である。内外を黒漆で塗りその上に金箔を押し、内部は金蒔絵、螺鈿、極彩色を施し、随所に銅の透彫りの金具を打って装飾とするなど当代美術の粋を集めた

もので、地方にありながら藤原時代を代表するに足る建築である。堂内中央にあ華麗な仏壇の下に藤原三代の遺骸を納めていたのは有名である。この堂には鎌倉時代に覆堂おおいどうを設けて保護され現代にいたっている。（美術出版社、「中尊寺」）

寢殿造 平安時代の公家の住宅形式をいう。この名称は寢殿と名づける正殿が中央に南面し庭に向っているからである。その東西及び並たいのやに對屋（寢殿の左右にある少し小さい別棟の建物）があり、渡廊によって連る。また前方庭に突出して釣殿（泉殿に相對して、釣のできるように泉水に臨んでいる建物）及び泉殿という別の建物があり、廊下により對屋と連る。これらは檜皮葺で床は板敷、随所に畳を置いて座としたもので、今日ではその遺例は見られない。

・ 絵 画

大和絵、日本画には二系列がある。一つは唐絵からえ（漢画）他は大和絵やまとえ（倭絵）である。唐絵は文字通り、中国の絵画様式をもとにした日本画で、わが国上代絵画はすべて唐絵であったが、平安時代になり、この中国画の様式を脱却し、日本独自の表現様式が生まれた。これを大和絵と称した。当時唐絵、日本絵の区別は技法の外に中国の事物を描いたものが唐絵、日本の題材を描いたものを大和絵と呼んでいたらしい。大和絵は主として宮廷、貴族の鑑賞を対象とし、その保護の下に発達したが、主題のみでなく様式や技法上にも、彼等の生活感情も適確に表現し、日本的優雅さを示している。平安時代の大和絵は、現在では僅かに源氏物語絵巻やその他の物語絵についてしのぶより他にない。大和絵の特徴として、(1)情趣的 (2)繊細的 (3)官能的 (4)装飾的が考えられる。（「大和絵名品展記録」から）

絵巻物 現在の絵巻の数は凡そ150点ばかりあるが、その中でも下記の4つは代表的作品である。それが藤原時代の制作であるので、当然本時代に掲載されねばならぬ。社会科教科書には、数多くの絵巻がでていますが、これはこの絵巻を通じ、風俗、生活状況、或いは当時の様子を知る資料としてであるので、図は非常に非美術的であることはいなむことはできない。美

術文化としては、この4つ写真版、特に源氏物語絵巻だけでも彩色のものがほしい。さてこの4つは、それぞれ異った技法、様式により、それぞれ別個の世界を形成していることが意義深い。

即ち「源氏」が濃彩の作り絵風で、貴族生活を題材としているが、「信貴山」は活動的表現を描線本位の画風で、庶民生活を描いている。従って前者は旧時代の精神を、後者は新時代の先駆的作品である。この2つの作風を折衷したというべきものが「伴大納言絵詞」と見ることができる。そしてこの3つの外に墨一色の描線を活用して、動的世界を形成したものが「鳥獣人物戯画」である。(絵巻物全集)

源氏物語絵巻 4面(東京、黎明会、紙本著色、絵15面、詞28面、各縦約22・0、横約23.0~49.0) 源氏物語 絵巻13面(東京、五島美術館、紙本著色、絵4面、詞9面各縦約22.0横約23.0~49.0) この絵巻は、女絵系統の濃彩の作り絵で、人物には大和絵固有の引目鉤鼻、建物には吹抜屋台の様式を用い、所々にすやりがすみをなびかせた典型的な作品である。特に詞も優雅な料紙に美しい仮名がきをもってしたためてある。絵は藤原隆能、詞は藤原伊房との伝がある。

教科書には名称だけが2冊、図版が6冊に出ている。この図の中で、「柏木、絵2」の段が2冊に、「竹河、絵2」の段が4冊に掲載されている。勿論いづれを掲載してもよいが「柏木」の場面は、保存も良好で、この絵巻の色彩を理解する上に規準を与える。且つ「作り絵」の様式を知る上にも参考になる画面である。また色彩の織りなす旋律は、まことに快く華やかである。文部省発行の鑑賞資料は、この場面が使用されている。「竹河」の場面は、殊に色彩が美しく姫君や女房達の衣の色どりは、まさに王朝色を象徴しているかの印象を与えるとともに、建築の構成、人物の配置等の構図は至極出来栄がよい。岩波写真文庫、「源氏物語絵巻」参照。

信貴山縁起、3巻(奈良、朝護孫子寺、紙本著色、飛倉巻、縦31.5、全長872.2、延喜加持巻、縦

31.5、全長1273.0、尼公巻、縦31.5、全長1416.0、) 絵巻物は藤原時代以降さかんに制作されるにいたったが、その遺作としては、前記の源氏と本巻とが、おそらく最古のものであって、最優の逸品とし貴重な作である。本巻は大和絵固有の流麗な描線を駆使し、流動的な構図法等により巧みに主題の展開を処理し、生彩にとんだ情景の表現にその美しさを現わしている。筆者は鳥羽僧正覚猷と伝えるが確証はない。

教科書には、名称(欄外に)だけが1冊に、4冊に図版が掲載されているが、著色のものは1冊で、ほとんどが「飛倉巻」の中から掲載されている。「岩波写真文庫」。美術出版社、「信貴山縁起絵巻」参照。

伴大納言絵詞 3巻、(東京、酒井忠博、上巻縦30.4、全長828.1、中巻縦30.4、全長851.1、下巻縦30.4、全長921.7、) 前記の信貴山縁起と描写に於ては、似ているが、その活動的情景の構図描法等に特色を発揮している。本巻は筆致がいっそう巧緻となり表現も繊鋭になっている。信貴山縁起より、年代は降るが、技巧の上ではさらに発展した抜群の作であって、作者は常盤光長(土佐光長とも藤原光長ともいう)と認められている。

教科書には掲載されていないが、考慮すべきである。岩波写真文庫、「伴大納言絵巻」参照。

鳥獣人物戯画、4巻(京都、高山寺、紙本墨画甲巻、縦30.5、全長1148.4、乙巻縦30.6、全長1187.9、以上平安時代、丙巻縦30.9全長933.3、丁巻縦31.2、全長1130.3、以上鎌倉時代) 上記の如く、甲、乙巻が藤原時代のものとされているので、この巻について記す。甲巻は猿、兔、蛙等を擬人化してその遊戯のさまである。乙巻は多数の鳥獣群が描かれている、ともに同筆であり、描写が最も優れ、その連綿流動の作風は本時代の特徴が顕著である。作者は天台座主となった高僧、鳥羽僧正覚猷の筆とされているが、伝えにすぎない。

教科書には、7冊に掲載されているが、4冊には、兔と蛙の相撲の場、1冊には、逃げる猿とこれを追う兔と蛙、残り1冊には、1匹の蛙がひっくりかえり、大勢がまわりに集まってい

る場面があるが、いずれを図版とするも「岩波写真文庫」位は見せたい。

それは全絵巻を通じてである。尚白描^{はくびよう}については、室町時代の墨絵で語りたいが、常識的に、墨の描線だけの絵画、或は少しの淡彩のある絵画のことである。岩波写真文庫、「鳥獣画絵巻」。

山水屏風^{さんすいびようぶ} 1隻（文化財保護委員会保管、絹本著色、6曲各、縦146、4横幅42.7）山水屏風は、密教の灌頂^{かんじよう}の儀式に使うもので、本屏風は、救王護国寺伝来の1隻で、面致はもっともすぐれ、本時代唯一の遺例で、唐絵の一例であるが、描写は唐様式を脱脚して大和絵化され、藤原期特有の優雅さを横溢させている。特にこの屏風は当時の唐絵屏風として唯一最古のものであり、制作の優秀な点に加えて資料的にも、また大和絵山水画の作例としても、極めて貴重なものである。

阿彌陀聖衆来迎図^{あみだしやうじゆうらいごうず}、3幅（和歌山、有志八幡講18箇院、絹本著色、中幅縦210.0 左右幅、各縦210.0 横105.2）本図は裏面の修理銘によれば、もと比叡山安楽谷にあって、天龜2年（1571）織田信長の比叡山焼打ちを契機として高野山に移されたという。わが国仏画中群像描写に於て最も優れ、かつ画面下部には広々とした水面と水際を描き、浄土教信仰の彼岸^{ひかん}と此岸^{しがん}とを対比させ、雲脚は来迎の速度を表現している。この来迎思想は恵心僧都源信（941～1017）により大きく発展した。現存来迎図の遺品では、鳳凰堂壁扉に描かれた九品来迎図（国宝）が最も古いことを付加する。「鑑賞資料」文部省。

・彫刻

阿彌陀如来坐像、定朝作（京都、平等院、木造、像高283.9）、藤原時代の仏像の典型は、定朝（天喜五年、1057歿）により完成された。それは浄土教を信仰する当時の公郷精神を適格に表現した様式で、しかも木寄法^{きよりほう}を完成した軽快な木彫技法は、絵画の大和絵の完成と同じく、彫刻の日本形式と様式とが成立したことになる。本像は定朝晩年（1053）の作として、円熟した形式、技巧をうかがうのにふさわ

しい。像は中空で、藤原時代独特の優雅、閑静さが感じられる。さすが本像は、教科書には全部掲載されている。本像の他、藤原時代の特色を示すものに、天蓋^{てんがい}、雲中供養菩薩像の51軀一共に国宝一も忘れてはなるまい。美術出版社刊。「平等院」。



阿彌陀如来三尊像（清水寺）

阿彌陀如来坐像、両脇侍坐像（島根、清水寺木造、中尊、像高89.5、脇侍、像高68.2）島根県安来市清水寺、常念仏堂に安置され、京都、三千院の阿彌陀如来像に似た、来迎形式で両脇侍は正座している、地方には珍しい像で、刀法もするどくあざやかであり、藤原時代の特徴を具備したもので、旧国宝であった。脇士は、中尊の左が聖観音なれど、標識である化仏を失っているのは惜しい。尚蓮華を持参していたものと考え。右は勢至観音で標識に瓶がある。島根県の仏像中最も美しいものである。尚当寺には秘仏、十一面観音立像（木造）があることを記す。（「島根の文化財」第一輯）

良弁僧正坐像（奈良、東大寺開山堂、木造、像高92.4）東大寺の根本僧正といわれる良弁（宝龜4年773寂）像は、記録に、僧正堂（根本僧正御影堂）に於て、寛仁3年（1019）11月16日に、始めて良弁僧正の忌日の儀式を行なった旨が記してあるので、この時、僧正堂が建立され、造像されたものと想像されている。

彫像の様式は、ところどころに鎌波式刀法に近い特色を示しているが、法衣、衣文線が形式化され、彫りも浅く装飾的に、おだやかであることから本時代の前期とされている。

本像は、東大寺としても最も貴重なるものの

一つで、秘仏である。

他に空也上人像が5冊に写真判で掲載されているが、これは念仏宗布教の資料とされることが多いと見て割愛した。

行道面、舞楽面 舞楽は奈良時代以来行なわれてきた古典的な音楽舞踊で、その一部は現在、雅楽の名で行なわれている、その多くは奈良時代の前後に中国から伝えられたが、伎楽とは異り、劇的な身振りよりも律動的な舞踊を主としたもので、用いる仮面や楽器もそれに応じて洗練された多様さを示した。

〆行道面、は、仏寺で行なわれる練供養の時に用いる仮面で、仏像を運ぶ時、それを担うものや、周囲を警護するものが着用し、種類を仏の守護神（八部衆、十二天二十八部衆とか）に限られる。又特殊なものに來迎会がある。これは阿弥陀如来を中心とするもので、二十五菩薩の仮面を用いる。なおこれらの仮面は、神聖なるものの姿に紛装するために用いるので、仮面の表現の面白さは乏しい。普通の演劇、演舞とかを目的として用いない。

遺品は、法隆寺、教王護国寺に平安時代のものである。

〆舞楽面、舞楽に使用する仮面、この面の特徴は、舞楽が律動を主とするので、表情もそれに相応するように象徴的であり、演出時間の長いため形は小さく薄手である、遺品としては著名な社寺に多く伝える。

。工 芸

石製経筒（島根、鰐淵寺、高40.4 胴径27.4 口径21.2 重さ48.75kg）工芸としてあげるのはいかがかと考えたが、島根文化財として挙げることにした。石製円筒状の経筒で、上線に蓮弁飾、底部に多角形の台と円形のふたがあり、筒

身の外側をめぐって「釈迦文仏来法身子僧円朗始自仁平元年辛未2月30日至干同3年癸酉5月2日殊致精誠」以下略の銘文がある。もと鰐淵寺裏山の浮浪滝の金剛蔵王窟に納められたもので、藤原時代行なわれた石窟納経の重要な遺物である。（「島根の文化財」第一輯）

他の工芸品は、紙数の制限のため割愛したので、美術全集其他を参照されたい。

5. あとがき

日本美術文化に於て、彫刻は鎌倉時代で一応終るので、何とかして鎌倉時代までは発表しなかったが、紙数の制限で、内容を思い切って略し、用語人物にはふれずやと藤原時代まで発表することができた。従って詳細は参考書によって補っていたらきたい。

文化財の選択には種々の問題もあるが、これも最も最低限にとどめ、他はカッコで示した。名称は「国宝事典」（便利堂）によった。特に郷土のものについての認識が一般に不足であるので、「島根の文化財」（第一輯）を参考にして記載した。尚、調査に使用した教科書は、印刷の古いものもあったと思うからことわっておく。本研究により、一応日本美術文化についての系統が立ったが、学習指導については、幾多の問題が残る。美術科では、鑑賞、であるので社会科に於ける史実を基として、視覚性による美の追求に重点をおくべきであると思う。そうすれば、美術史的学習でなく、鑑賞の立場からの学習が展開されると思う。特に私には社会科については、微力であるので、大方の指導をお受けしたい。—未完—

（昭和38年9月3日受付）